と、暗灰色粘質土であることから、水田耕土と考えられる。このことから、拝所は本来あった水田を埋め立てて造られており、Ⅲ層は拝所整備時の盛土と考えられよう。水道管埋設箇所のうち断面図２は、16×0.5mの範囲を深さ30cm掘削した。その結果、断面で４層を確認した。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は灰色粘質土で、見張所改築箇所との対比から拝所整備時の盛土と考えられる。Ⅲ層は黄褐色粘質土が多く含まれている灰褐色粘質土である。Ⅳ層は地山である。ここでは、水田のものと思われる耕土が確認できず、また隣接地は畑となっている。このことから、Ⅲ層は畑の耕作土だった可能性が考えられよう。

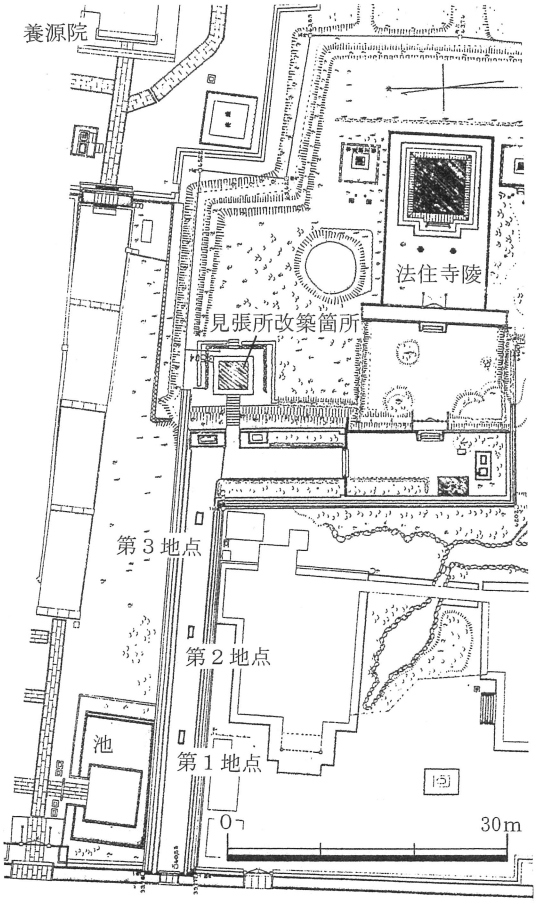
上記以外にも電気管・排水管埋設箇所など、掘削を伴う箇所についてはあらかじめ試掘を行ったが、掘削深度はいずれも周辺の水田面とほぼ同じレベルに止まっており、工事に支障のないことを確認した。また、遺構・遺物は検出されなかった。

上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。　（清喜裕二）

後白河天皇法住寺陵見張所改築工事箇所の調査

後白河天皇法住寺陵は、京都市東山区の三十三間堂の東南に位置する法華堂である。この付近は後白河上皇の院御所である法住寺殿の跡地に当たっている。

この度、その見張所を改築することになり、平成13年12月13～16・18日に、見張所改築箇所（約8.7㎡、深さ0.5m）、および給排水管埋設箇所（長さ約50m×幅約0.5m×深さ0.3m）のうち、３箇所（各長さ１～1.5m、幅約0.5m×深さ0.3m）の掘削に立ち会った。また、翌年の１月16・18・29～31日と２月８日には、給排水管埋設箇所の残りの部分と参道入口部下水管本管接続箇所（長さ約1.5m×幅約0.9m×深さ1.65m）の掘削に立ち会った（第37・38図）。



第37図　法住寺陵調査箇所の位置図(1/800)

見張所改築部分は、参道の奥まったところ、法華堂の北西に位置する。見張所や法華堂が位置する箇所は、参道に比べて３m以上の比高差があり、周辺地形や古い地形図などを参考にすると、本来は法華堂から参道にかけて、緩やかに下降する地形であったと考えられる。

この部分は、北側と東側をそれぞれ最大約１

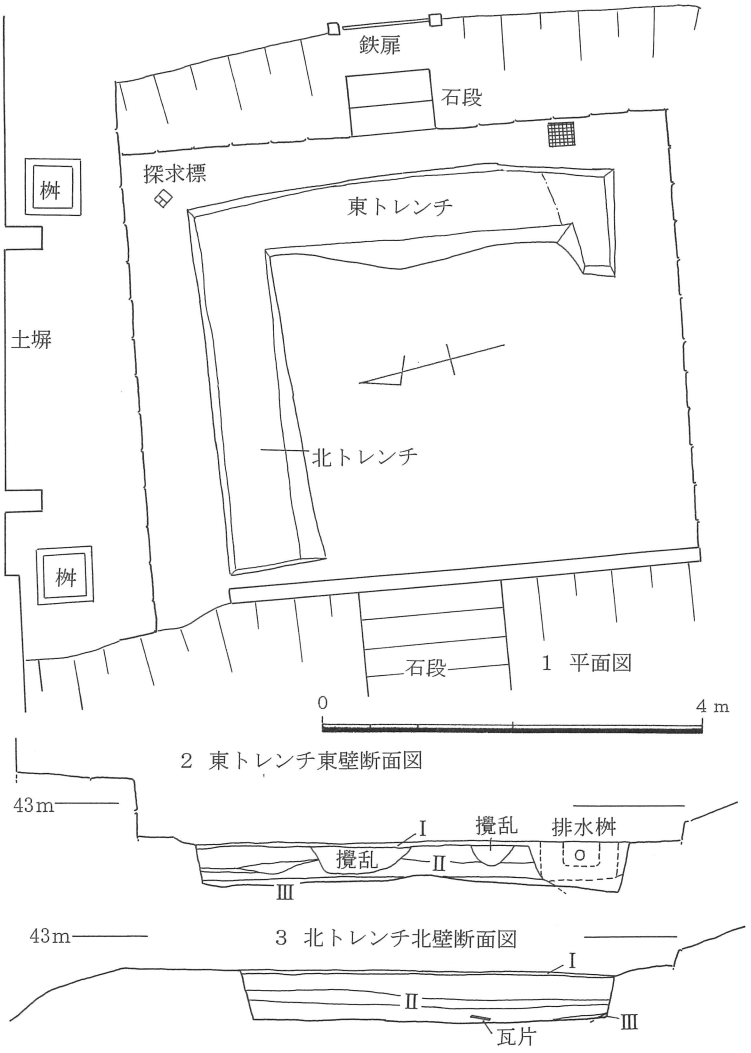
m幅で掘削した（第39図）。その結果、表土（Ⅰ）下には煉瓦やモルタルを含む盛土（Ⅱ）があった。旧見張所建設時に攪乱されたものであろう。東端付近では、その下位に堅緻な黄褐色土（Ⅲ）が認められ、西側に向け緩やかに下降していた。狭い範囲でしか確認していないが、地山の可能性が高い。

一方、給排水管の埋設は見張所と参道入口を結ぶもので、長さ約50mを測る。表土（Ⅰ）下は燻瓦や礫を含む盛土（Ⅱ）で、その下位は非常に堅く締まっていた。注目すべきは、参道のほぼ中央から西側（入口）にかけて認められた暗黒灰色土（Ⅲ）である。比較的締まりはよいが、有機物を含み、腐臭を伴う泥炭層である。下水管本管接続のため、1.65m程掘り下げた入口部分ではⅠ・Ⅱ層が約0.7mあり、その下は床面まで、Ⅲ層であった。北に隣接する養源院の池は、かってはこの付近にまで及んでいたことが知られており、その埋め立て土と考えられる。法住寺殿には、いくつかの池があったことが判明しているが、それらとの関連も考慮しておくべきであろう。

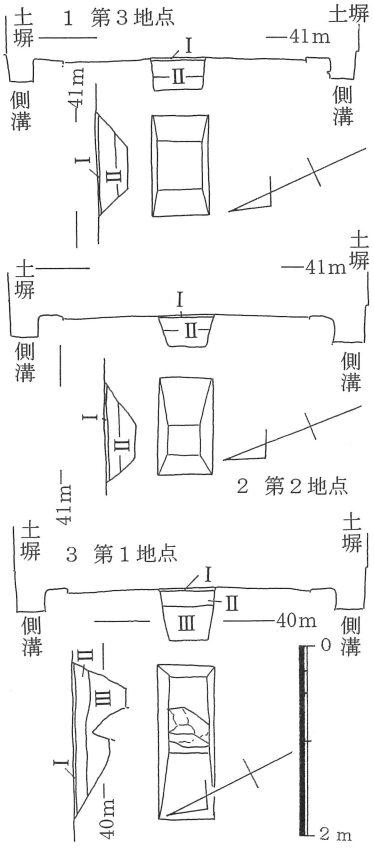
遺物は、見張所改築箇所東区のⅡ層から土師器、陶器（高台あり）が各１点出土している。いずれも摩耗の著しい小片で詳細は不明である。

工事は予定どおり施工した。

（福尾　正彦）



第38図　法住寺陵調査箇所の平面図及び断面図（１）(1/80)



第39図　法住寺陵調査箇所の平面図及び断面図（２）(1/80)